

Title	田中惣五郎著 幸徳秋水：一革命家の思想と生涯；山極圭司著 木下尚江：一先覚者の闘いと悩み
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.4 (1956. 4) ,p.281(43)- 285(47)
JaLC DOI	10.14991/001.19560401-0043
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560401-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

告し、ここに資本制的矛盾と勞資の階級對立はおおうことのできぬ現實となつた。

もはや「賃労働」關係を自然的・調和的關係とみなし、レッセ・フェールを叫んでいることは現實そのものが許さなかつた。いまや經濟學は何らかの形で古典派體系をうちやぶつて、かかる現實にこたえる理論を確立しなければならなくなつた。

一方では、古典學派が事實上示したところの「敵對的なもの」を自覺的に取上げ、資本制制度を攻撃する社會主義が現れ、これは資本主義の歴史的認識と剩餘價值理論の確立によつて、現實の諸矛盾の深化とその止揚の必然性を解明するマルクス主義へと發展していつた。だが他方では、古典學派から勞資の依存性・調和性の主張のみに抽出し、資本の生産性を指摘することによつて勞働價值論を歪曲し、諸矛盾や階級對立を緩和する政策を通じて資本制制度を擁護していこうとする努力が展開されていつた。ここに古典學派は兩極に分解しながら崩壊し、「賃労働」問題も全く異なる立場から分析されることになるが、かかる過程は次稿であきらかとしよう。

X X X X X X X

〔附記〕これは修士論文、第二章の要約である。前稿、本稿ともに紙数の關係上一節をほとんど割愛したため、彼らが當時のブルジョアジーの實踐的課題を如何にうけとめていたのかを當時の時代的背景との關聯であきらかにすることができなかつた。従つて、考察は體制認識(二節)が理論分析(三節)を規定づけた關係に限られたが、學說史的研究では、かかる體制認識自體が、歴史的諸條件とそれとの階級的な要求を如何に反映し、それによつて

如何に規定されたか、(一節と二節の關聯)をふかめることは、いま一つの重要な課題である。この點いずれあらためて發表する豫定である。

—一九五〇・一二・一〇—

書評及び紹介

田中惣五郎著

『幸徳秋水——一革命家の思想と生涯』

山極圭 司著

『木下尚江——一先覺者の闘いと悩み』

最近、日本の近代史にかんする研究がとみに盛んになつてきた。遠山茂樹氏等の共著になる「昭和史」がベスト・セラーとなつて、ひろく讀まれ、また井上清氏等の「日本近代史」が非常に好評であつたことは、これらの書物が、啓蒙書として實にすぐれた素質をもつていたことにもよるが、しかしそれだけではない。大衆が何かしら求めているものが、われわれの祖國の眞實の姿である以上、戦争から戦争への日本の八十餘年が、われわれの先輩たちの上にとどのよるな彈壓と拷問とそして極刑を加えたか、しかもそれらの先覺者たちが、この苦難にいかにして耐えてきたかという熱烈なしかも素朴な關心、こうした現代のわれわれの誰の心の中にも動いている意慾が、われわれを明治思想史や日本の近代史にかりたててののではないのか。

もとより歴史は、少數の偉人や先導者たちがつくるものではなく、民衆がつくるものであることは云うまでもない。しかしながら、從

來までの日本近代史において、民衆の姿が眞剣にとりあげられたことがあつたらうか。それは天皇制を中心とする支配者のための歴史であつたし、敗戦前までの日本の歴史學は、專制的な支配者のために、歴史的な事實を故意にゆがめることに力をつくしたのである。「中國侵略が大がかりになり、天皇制ファンズムがひどくなるともに、明治時代の研究といふことは迫害さうけるようになりまし。そして御承知のように日本の歴史學といふものは、眞理を探究するのではなくて、眞理を系統的にゆがめるためのものとなり、にせ歴史學が横行した」のである。

それゆゑ、日本近代史上において、いわゆる反國家的な思想の持主、專制政治にたいして忌憚ない批判をあげせかけをおそれなかつた人々の名はうすもれていたし、これらの人々のすぐれた思想もかえりみられることが少なかつた。いま、わたくしがここにとりあげた二つの著作は、こうした意味でうすもれた人々、明治絶對政權にたいして、社會主義をとなえてたかたつた人々の、苦難と迫害にみちたその生涯をとりあつたものである。だがこれらの先驅者たちの業績が今日正しく評價されなければならないその理由は、これらの人々が忘れられ、うすもれていながらというよりは、これらの革命的民主主義者たちの思想が、何よりも植民地的隷屬と反動的な政治の重壓のもとに悩む現在のわれわれにとつて、なおかえりみられるべき多くのものをもつているからにはかならない。

(1) 雑誌「思想」昭和三十一年一月號四八頁、井上清氏「自由民権運動をめぐる歴史的评价について」

二

明治絶對政權に批判的であつた民主主義者たちは、大體においてつぎの三つの類型にわけられると思う。第一に、トルストイ流の人道主義から出發してキリスト教徒となつた者、第二に、ルソーやヴォルテールなどのフランス啓蒙思想の影響をうけて革命的民主主義者となつた人々、第三に、さらにそれらをこえて、社會主義または無政府主義に入つていつた人々である。もちろん、この類型のいずれにも屬しない者もあつたらうし、またこれらが混然としていりまじつていた思想家もあつたと思われるが、しかし大體においてこの三つは、明治思想史をつらぬく大きな思想的潮流であつたといふことができよう。そしてここにあげた二つの著作の主人公、幸徳秋水と木下尚江は、ほぼこの三つの思想的傾向の第二、もしくは第三のものを代表していると云うことができる。

塾祖福澤諭吉は、日本における民主主義の偉大な先覺者であつたが、田岡嶺雲や植木枝盛は福澤から大きな思想的感化をうけつつ成長した革命的民主主義者であつた。そうだとすれば、木下尚江と幸徳秋水は、それぞれ独自の方法で、これを繼承し發展させた人々である。尚江は、一八六九年（明治二年）信州松本に生れたが、秋水はそれよりおくれること二年、明治四年高知に生れた。山極圭司氏と田中惣五郎氏は、ほぼ同時代にあつて同志として活躍したこの二人を、それぞれ獨特の態度で論じておられるが、兩書ともすぐれた勞作であることは云うまでもない。とりわけ、山極圭司氏の尚江にたいするすぐれた研究態度、平明な文章には心から感嘆を禁じえない（六四頁）。

がて彼は、クロムウェルを生んだイギリス憲法を研究すべく、イギリス法律學校に入り、これによつて、彼は辯護士を志さざるをえなかつたが、しかし若い時代の尚江をかりたてて、やがて社會運動にふみ出させる第一歩となつたものは、キリスト教であつた。キリスト教こそ、彼の生涯を通じて離れるべくして離れ得ないものだらうである。相馬愛蔵を知つたのは中學時代であつたが、この地方の新興ブルジョアであつた相馬から、色々な影響をうけたと云われる（六四頁）。

だが彼はどのようにしてキリスト教と交渉をもつようになつたか。さきによつたように、明治時代における民主主義者のなかで、キリスト教的な人道主義にみちびかれて社會運動に入つた人も少くなかつた。たとえば安部磯雄の如きもその一人であつたが、尚江も最初は、キリスト教が、日清戦争に際し、戦争を肯定したのをいきどおり、教會のキリスト教に絶望したといえ（六一頁）、やはりキリスト教の人道主義にみちびかれて、普通選挙運動に入りそしてジャーナリストとしての文筆活動を通じて足尾銅毒事件に注目し、田中正造と親しくなつた。こうして農民や勞働者大衆の悲惨な状態をつぶさに見聞するに至つて、やがて社會主義思想に接近したのであるが、自由民権運動から社會主義への思想の遍歴について、「日本の下層社會」の著者、横山源之助や二葉亭四迷からも感化をうけたといわれる（八三頁）。

尚江が秋水と相識つたのは、明治三十二年彼が毎日新聞に入社以後のことであつた。しかしその當時においては、その思想の急進性において幸徳は、はるかに尚江に及ばなかつたし、尚江は、幸徳の

い。田中惣五郎教授の「幸徳秋水」は、およそ今迄に出たあらゆる秋水傳を大成したかと思われほど詳細なものであり、資料の點できわめて貴重なものであると考えられる。しかしながら、淺學な筆者の批評を率直にのべさせていただくならば、多少、資料のあつかい方が不適當なために、やや繁雜の感がないでもない。

尚江と秋水とは明治三十年代において、お互いに同志でありながら、その人生觀においては、非常に異つていた。同じく自由民権運動に刺戟されて社會主義運動に入つたにせよ、その最後は、あまりにもかけはなれていた。以下、この二書を通じて、この二人の闘いと苦惱のあとをたどるであらう。

偉大な自然にかこまれた城下町松本にそだつた尚江が、やはり大きな影響をうけたのは自由民権運動であつたし、またパーレーの「萬國史」を読んでオリヴァー・クロムウェルのチャールズ一世を斷罪したことを知り、胸をおどらせた。そして福澤諭吉の「學問のすずめ」は、彼に「言語につくせぬ素晴らしい」感動をあたえたといわれる（尚江「三六頁」）。さきの植木枝盛と同じように、彼も、この偉大な啓蒙家によつて、戰闘的な民主主義への眼を開かれたのであつて、尚江もやがて福澤とはちがつた方向に進んだといえ、その感化は無視することができない。クロムウェルを知つて、天皇處刑を夢見た頃の彼が、中學時代をすごしていたのは、自由黨左派の急進的な運動が盛んな頃であつた。すなわち、明治十五年福島事件、十六年の高田事件、十七年の群馬事件、加波山事件、秩父事件、飯田事件、名古屋事件などで、このような一連の騒動は、若い彼の胸に權力にたいする火のような憎悪をもたせたことであらう。や

先輩であつた。この點について田中惣五郎氏がつぎのようにのべているのは興味深いものがある。「林有造の書生として保安條令におわれ、やがて中江兆民の書生として國民英學會にまなぶにおよんで、このインテリ民権家中江兆民の生活と行動は、幸徳にとつて父であり、師であり、また心の糧でもあつた。……もし中江なかりせば、自由民権運動の末期的腐敗にあいそをつかした幸徳は、もつと早く社會主義に脱皮したかもしれなかつたのである」と（「幸徳秋水」二四頁）。

このようにして尚江と幸徳とは、明治三十年代以後、次第に社會主義者としての活動に入り、やがて、社會民主黨、社會主義協會足尾銅毒事件を通じて、同志として戦い、とくに片山潜、安部磯雄、西川光次郎等とともににはなばなしい反戦運動に入つていたのである。しかしながら實際に、秋水と尚江がどのようにして社會主義者になつたのであるか。この二人をみちびいて社會主義運動にかりたてたものは、云うまでもなく彼等の良心的な態度、革命的な熱情の結果でもあつたらうが、またその當時の社會的政治的狀態を忘れてはならない。

明治三十年といえ、日本は日清戦争の勝利によつて莫大な償金を獲得、資本主義は急速に發展して勞働者の數も飛躍的に増大し、勞働問題がやかましく叫ばれるようになった時代であつた。勞働組合期成會が、片山潜、高野房太郎、澤田半之助等によつて結成され、鐵工や活版工をして日本鐵道會社の日鐵矯正會などが中心となつて、わが國の勞働運動史上、最初のともいひ、びがかかげられた時期でもあつた。こうした、時代のはげしい息吹きを身に感じながら、「明

治三十年の社會問題研究會に石川安次郎にともなわれて、はじめて出席した秋水は、一夜本郷の同人の家にとまり、今日はもはや自由民権の時代でなく、新旗幟をたつべく社會主義の研究をやるという出したのだ(「幸徳秋水」一二五頁)。秋水と尙江がいつどこで知り合ったかは明らかでないが、おそらくこの社會問題研究會のあとにできた社會主義研究會において、非常に親しくなったものと考えられる(「木下尙江」一〇六頁)。こうして明治三十一年二月の日本鐵道のストライキの勝利、三十三年の治安警察法の制定、三十四年の足尾銅毒事件などの重大事件のなかに、二人は、社會主義者として成長していったのであろう。

やがて明治三十四年、片山潜、安部磯雄、西川光次郎、木下尙江、幸徳秋水、河上清等による社會民主黨が治安警察法によつて解散を命ぜられたとき、それは明治絶対政府の社會主義弾壓政策の露骨さを示したものにほかならなかつた。すなわち社會主義者としての彼等の前途には、早くも暗雲が姿を現わしはじめた。社會民主黨は再び社會主義協會にもどり、「労働世界」は「社會主義」と改題してその機關紙となつた。しかしながら労働運動にたいする彈壓がきびしくなり、日鐵矯正會は解散を命じられたけれども、秋水や尙江の社會主義運動はひるまなかつた。やがて日露の風雲急を上げるに至つて、社會主義者たちの反戦運動は活潑となつた。

(1) この革命的民主主義者という用語はこの場合必ずしも適當ではない。わたくしは、これによつて、十九世紀ロシヤの革命思想家ゲルツェンやチエルヌイシエフスキーを想ひうかべる。だが秋

ら、平民新聞を手つた尙江の「二足のわらじ」は次第に重くなつていつたようである。そしてやがて平民社が經濟的理由や、堺利彦と延岡爲子、西川光二郎と松岡文子との戀愛などの個人的な感情的なもつれが理由となつて解散のやむなきに至つたとき、「平民社の時代」は終つたのである。

これまでは、秋水も尙江もその思想と行動においてほとんど一體であつた。しかしその後、秋水はアメリカに渡つて無政府主義の洗礼をうけ、戰闘的な革命家となつて歸つてきた。そしてやがて、明治四十三年大逆事件によつてその多難な生涯を終えたのだが、尙江は、秋水とはまつたく別の道を歩んだ。ところで尙江はすでに、議會に對して深い懷疑をいだいていたはずである。それ故に煩悶し苦惱したはずである。だが結局彼はまた、望みを議會に託したのである。つまり彼はその懷疑を一應神でうめあわせて、再び普選獲得、議會闘争に目標を定めたのである。彼としてはそれ以外に、やはり道がなかつたのだ。しかし彼のいだいた懷疑を、議會主義への懷疑を、ひたすらつきつめて行つた人間がいた。それは幸徳である(「尙江」一八六頁)。

「幸徳の思想の徹底は實に壯嚴の感をあたえた。それと同時に彼と僕との關係に就いて、僕は眞に云うべからざる寂漠を覺えた(中略)。此の五六年一つ『社會主義者』としての共同の運動を續けてきたが、然し將來は如何だらう。此の將來と云ふことを思つた時に、現在の二人の關係を考えずに居られなかつた。僕は首を垂れて暫ばし思案に耽つたが、是れは丁度『背中合わせに手を握つて居るのじや無いか』と、不圖思つた」(「尙江」一八七頁、傍點筆者)。こ

水や尙江をふくめてひろく、明治絶対主義に批判をあびせた人々を、ここで一應革命的民主主義者と考へよう。

三

すぐる太平洋戦争中に、戦争を眞向から否定した人がほとんどいなかったという事實は、「戦争反對」ということが、現實にどんなに困難で危険なものであるかを教えてくれる。その意味で日露戦争に際して、社會主義の立場に立つて終始一貫、戦争反對を叫びつづけた平民社の運動は、まことに偉大であつたと云わなければならぬ。日露の間に戦争の危機が増大したとき、敢然として戦争に反對したのは、急進自由主義となえる新聞萬朝報であつたが、やがて主戦論が勢を得るにつれて、社長黒岩涙香はやむなく主戦論に轉向したため、内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦などは退社した。そして内村をのぞいてこれらの人々はいわゆる平民新聞をつくつて、活潑な反戦運動に従事した。しかしながら、この當時の平民社の社會主義とは、マルクス主義と無政府主義、そして更にトルストイ流の人道主義との混合であり、尙江も社會主義者というよりは、人道主義者と呼ばれるべきであつたらう。

堺利彦や幸徳秋水が平民社によつて、反戦運動をしていたとき、尙江は毎日新聞紙上に、その力作「火の柱」を發表しつゝあつた。社會主義リアリズムの先驅ともいふべきこの小説は尙江の社會主義的な思想を吐露したものととして、今もなお讀む者の心を強くうづが、それにもかかわらず、彼等の運動はさまざまに困難をきわめた。三十七年十二月には社會主義協會は倒れ、毎日新聞社に勤務しながら

のように尙江は書いているが、この文章のなかに、尙江は同じく社會主義者と稱しながら、幸徳についてゆけない自分自身を見出したのであろう。こうして明治三十九年九月、彼は、政黨運動以外に自分の力をつくすべき事業ありとして、政治運動から退いてしまつた(「尙江」二〇五頁)。

以上で紹介したように、秋水と尙江の二人の生涯は、同志として密接な關係にありながら、その思想はあまりにも對照的であつた。

幸徳は無政府主義者としてキリスト抹殺論を書いたほどの、徹底した無神論者であつた。しかし尙江はやはり神を捨てることができなかつたのではなからうか。尙江が運動をすてたという限りでは、彼はたしかに脱落者であつた。しかし大逆事件で散つた幸徳が、もし死刑にはならなかつたとすれば、彼はその後一體どうなつたであろうか。人間の前途には無限ではないにせよ、多様の可能性があたえられてゐる。ただこの二書を読み終つて感ずることは、革命的な民主主義者の闘争がいかに困難と苦惱にみちたものであつたかということである。そしてこの闘いは、非人道的な搾取と不當な壓迫が存する限り、今もなおつづけられるのである。(理論社刊、幸徳秋水 七〇〇圓、木下尙江 四二〇圓)

(飯田 鼎)